



5,000年(人間)と5年(デジタル)の話

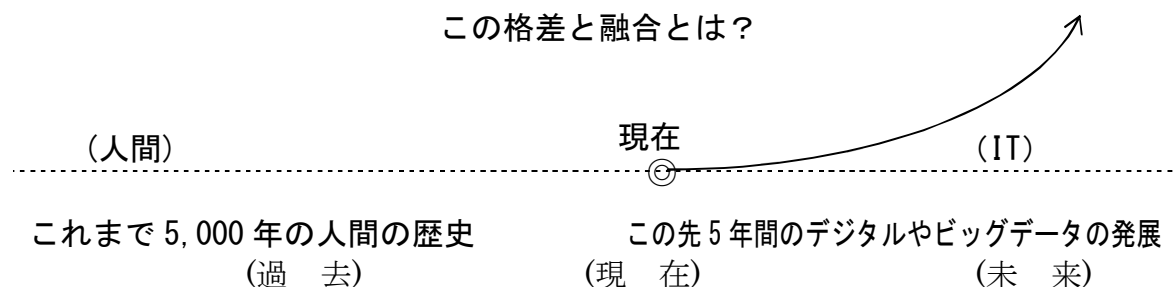
(12月のごあいさつ)

平成25年12月1日(日)

復帰のあとオリオンビールさんが南米から移植されたと言われている、沖縄のアキザクラとも呼ばれるトックリキワタの花が満開の季節となりました。

先日、東洋経済オンライン編集長 佐々木紀彦氏のご講演を聴いた。テーマは、「デジタル技術・社会の進展でビジネスはどう変わるか」。たった4ヶ月で、東洋経済オンラインのページビューを10倍に伸ばし、ビジネス誌系サイトのNo.1に引きあげた方である。質問させていただいたところ、そのポイントは、①ターゲット年齢層を30代に下げた、②紙のブランドからデジタルで切り離して作成したこと、③オープン、外部の人材も活用したことなどのこと。著書の中で言われている「紙」衰えし後に来る、メディア新世界の到来を感じさせるものであった。

未来の5年間を考えると、IT技術の発展やビッグデータの増加は、質的にも量的にもすごいものがあり、それは指数関数のグラフを見るような感じがする。人間の歴史は5,000年間であるが、少し右上がりの直線のようなもので、大きな変化はない。その人間が、企業を作り、社会を構成する。この過去からの5,000年と未来の5年の融合とギャップはどのように埋められて行くのであろうか？



講演のテーマと関連して、ギャップのある未来への推移が大きな疑問となって頭の中一杯になった。しかし、ITやデジタルの発展は果してビジネスや社会の価値や発展に結びつけることができるであろうか。

単に巨大なデータを集めて、傾向値や社会の嗜好を見つけて金儲けをするようなことだけでは、社会に価値を提供し、社会の発展を図ることはできるであろうか。

例え5年後において、ITやクラウドが社会サービスの基盤となりイノベーションが加速されるとして、それが社会の価値を高めるであろうか。単に、金融や流通や製造が効率化され、法律や会計が精緻化されたとしても、人間や社会の幸福につながるであろうか。どうもその辺りは明確な自信が持てない。単に一部の企業の利益の独占や金儲けの域を出ないというのでは悲しいし、意味もない。

我々は、5年後のデジタル的な進歩よりも、5年後の人間や社会の幸福と発展といったバランスと展望を目標として持つべきではないか。

人間とIT、デジタル、機械との新しい、あるべき関係も同時に構築する必要がある。